

第2章 WH参加者アンケート調査報告

農林水産政策研究所 鈴木源太郎

(1) 調査目的

本章では、「飯田市のワーキングホリデー（WH）に関するアンケート調査」について分析を行う。当調査は、長野県飯田市の行うWHの参加者を対象にアンケート調査を実施し、参加者の属性、WHの満足度、WHに求めるもの、農村定住とWHとの関連などについて把握し、WHの課題や今後のあり方を明らかにすることを目的としている。

飯田市のWHにおいては、参加者全員を対象としたアンケート調査を同市WH事務局がWH終了直後にその都度実施している。その調査結果は非常に興味深いものの、記述式アンケートが中心で、統計的な分析は十分行われてこなかった。また、調査がWH参加直後に実施されているため、多くの参加者が「熱の冷めないうちに」熱心な記述を行っているのも大きな特徴である。

この点、今回新たに実施したアンケート調査は、記述的な調査項目を減らし、客観的かつ定量的な分析が行えるよう工夫した。また、調査時期も、日常生活に復帰した参加者による冷静な回答が寄せられるよう設定した。

なお、調査結果については、自由回答部分を含め、飯田市WH事務局に全面的にフィードバックすることとし、同市の今後のWHの企画・立案に資するよう十分配慮を行った。アンケート調査票については本報告書の巻末に添付した。

(2) 調査方法

当アンケート調査は、2005年4月上旬に郵送回収方式により実施した。対象は、1998年から2005年の間に飯田市のWHに参加経験のある者約800人である。そのうち転居等の理由によって所在不明であることが分かっていた者を除く527人を対象に調査票を送付した。発送後、宛先不明等の理由で不達であったものが14通あったので、実質的な調査対象母数は513人である。なお、個人情報保護の関係から、WHの参加者名簿は市役所内に留めることとし、アンケートの発送および回収は飯田市役所農業課WH事務局に実施していただいた。

4月28日付の官製はがきによる督促（1回）を経て、回収数は264件、回収率は51.5%となった。なお、回収された回答の中に無効回答は存在しなかったため、有効回答数、有効回答率とも同上である。回答結果の入力および調査データの分析については、全て農林水産政策研究所が行った。

以下では、アンケート内容を、①概要、②参加理由、③WHへの満足度と評価、④WHへの再参加意志、⑤参加者の定住意志、の5つの項目に分けて分析する。

(3)分析結果

1)アンケート調査の概要

(i) 参加者の属性

回答者の年齢、男女別の分布を示す(第2-1表)。年齢別には、「30歳代」(30%)が最も高く、「50歳代」(23%)、「60歳代以上」(21%)が続いている。また、男女別には男性の割合が56%と若干高い。年齢別にみる男女比は、「60歳代以上」では男性の割合が高いのに対して、「20歳代」では、逆に女性の割合が高い。若年層ほど女性の比率が高く、高齢者ほど男性の比率が高い傾向にある。

参加者の年齢と同居家族との組み合わせから抽出した7通りの家族パターン⁽¹⁾の分布を第2-1図に示す。若年の独身男女の割合が合計で32%と高い値を示している。中でも若年独身女性は全体の18%を占めている。既婚者では、親世代が50歳代の「夫婦(子供大)」が13%、60歳以上の高齢世帯では「高齢夫婦のみ」の世帯が10%存在している。

家族パターン別に飯田市のWHへの参加回数をみると(第2-2図)、参加回数「1回」の割合が高いのは「若年独身(男性)」と「若年独身(女性)」であり、両者の過半数が1回限りの参加である。これに対して、「高齢夫婦のみ」の71%が「3回以上」参加の経験がある。また、子育てに忙しいと思われる「夫婦(小児子育て中)」の45%が「3回以上」参加している。

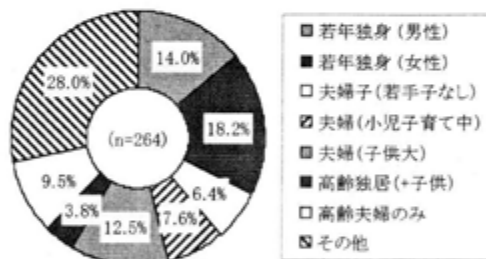
第2-1表 アンケート回答者の年齢・男女別分布

(単位:件, %)			
区 分	男性	女性	計
20歳代	9 (3.4)	26 (9.9)	35 (13.4)
30歳代	43 (16.4)	35 (13.4)	78 (29.8)
40歳代	24 (9.2)	10 (3.8)	34 (13.0)
50歳代	30 (11.5)	29 (11.1)	59 (22.5)
60歳以上	41 (15.6)	15 (5.7)	56 (21.4)
計	147 (56.1)	115 (43.9)	262 (100)

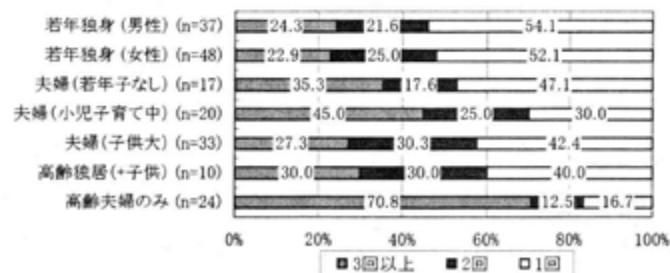
資料:飯田市農業課・農林水産政策研究所、飯田市のワーキングホリデー(WH)に関するアンケート調査(以下同様)。

注:1)表中()内の割合は分母から年齢・性別無回答を除く。

2)アンケート回答者合計は年齢・性別無回答者2名を含め264名である。



第2-1図 家族パターンの構成(単一回答)



第2-2図 家族パターン別にみる参加回数

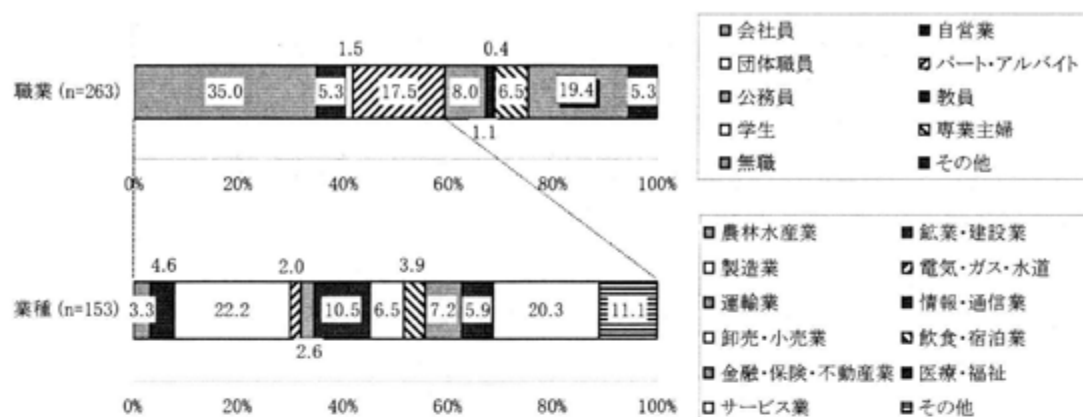
注:1)家族パターン、参加回数はいずれも単一回答。

2)無回答および家族パターンの「その他」の75件を除く。

第2-2表 アンケート回答者の居住地域
(単位:件, %)

区 分	件数(割合)
北海道	1 (0.4)
東北	2 (0.8)
関東	157 (59.9)
北陸	2 (0.8)
地域ブロック	
甲信	6 (2.3)
東海	41 (15.6)
近畿	46 (17.6)
中国	3 (1.1)
四国	1 (0.4)
九州・沖縄	3 (1.1)
無回答	2
地域類型	
都市部	124 (47.9)
都市郊外	120 (46.3)
平地農村	11 (4.2)
中山間農村	4 (1.5)
無回答	5

注:表中()内の割合は分母から無回答を除く。



第2-3図 回答者の職業及び業種の構成

注. 1) 参加者の職業、業種はそれぞれ単一回答。
2) 職業については無回答の1件を除く。業種については無回答および非該当の111件を除く。

第2-3表 農家との関係、農村のイメージ

		(単位:件, %)	
区 分		件数(割合)	
Q6(1)農家 との関係 (単一回答)	実家が農家	26	(9.9)
	親戚が農家	39	(14.8)
	非農家	198	(75.3)
	無回答	1	
Q6(2)農村 のイメージ (単一回答)	良いイメージ	93	(36.2)
	やや良いイメージ	104	(40.5)
	どちらとも言えない	44	(17.1)
	やや悪いイメージ	14	(5.4)
	悪いイメージ	2	(0.8)
無回答		7	
計		264	(100.0)

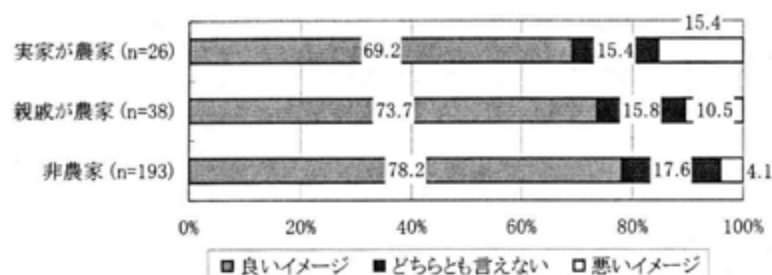
注. 表中()内の割合は分母から無回答を除く。

回答者の居住地域を第2-2表に示す。地域ブロックでは、「関東」が最も多く、全体の6割を占める。次いで「近畿」(18%)、「東海」(16%)の割合が高く、飯田市へのアクセスの良い3大都市圏からの参加者が圧倒的に多い。また、参加者の居住地の地域類型をみると、「都市部」(48%)および「都市郊外」(46%)が大半を占め、農村部からの参加者は6%にとどまる。

第2-3図は、参加者の職業・業種の構成を示している。まず、職業で最も割合が高いのは「会社員」(35%)であり、このほか「無職」(19%)、「パート・アルバイト」(18%)など、定年後と考えられるケースや流動的な職業の割合が高くなっている。「会社員」、「自営業」、「団体職員」、「パート・アルバイト」については、業種に関する設問を設けた。それによると、業種で最も割合が高いのは、「製造業」(22%)、「サービス業」(20%)、「情報・通信業」(11%)などとなっている。

(ii) 農業への関わりと関心

参加者の農家との関係、農村へのイメージを第2-3表に示す。農家との関係をみると、全体の75%が「非農家」であり、「実家が農家」(自家が農家を含む)と「親戚が農家」



第2-4図 農家との関係別にみる農村のイメージ(3カテゴリ)

- 注. 1) 農家との関係、農村のイメージはいずれも単一回答。
 2) 農村のイメージ(3カテゴリ)では、「良いイメージ」と「やや良いイメージ」を「良いイメージ」に、「悪いイメージ」と「やや悪いイメージ」を「悪いイメージ」にそれぞれカテゴリ統合した。
 3) 無回答の7件を除く。

第2-4表 参加年度と参加回数

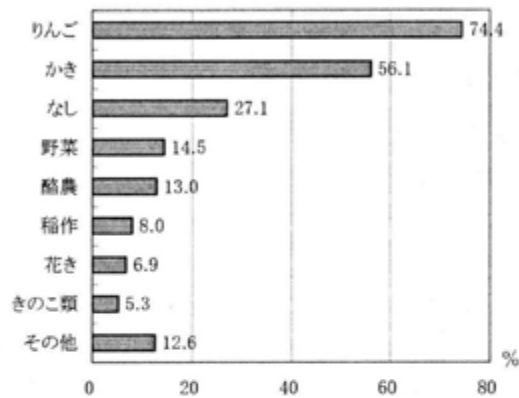
		(単位:件, %)	
区 分		件数(割合)	
Q8参加年度 (複数回答)	10年度	11	(4.3)
	11年度	16	(6.3)
	12年度	39	(15.2)
	13年度	34	(13.3)
	14年度	60	(23.4)
	15年度	113	(44.1)
	16年度	119	(46.5)
	17年度	6	(2.3)
	無回答	8	
Q9(1)参加回数 (単一回答)	1回	117	(44.8)
	2回	59	(22.6)
	3回以上	85	(32.6)
	無回答	3	
計		264	(100)

注. 表中()内の割合は分母から無回答を除く。

はそれぞれ、10%、15%である。農村のイメージは「良いイメージ」(36%)、「やや良いイメージ」(41%)の両方で8割近くにおよび、農村への親近感の高い人々がWHに参加していることが分かる。第2-4図は、農家との関係別に農村のイメージを示したものである。「良いイメージ」を持つ参加者の割合は「実家が農家」(69%)より「非農家」(78%)の方が高く、両者のポイント差は9ポイントである。

(iii) 参加年次・参加回数

WHの参加年度と参加回数を第2-4表に示す。参加年度について回答割合の高かったのは16年度(47%)、15年度(44%)である。参加割合は年をさかのぼる毎に低くなっている。これらのことから、最近参加し、WHの記憶の新しい者がアンケートに積極的に回答したものと考えられる。したがって、この参加年度別の分布は、実際の参加実績と大きく異なる。一方、参加回数は「1回」が45%と最も高いが、「3回以上」との回答も33%寄せられている。自由記入欄の結果より5~10回程度訪問している参加者も多くみられることから、リピーター率の高さが確認できる。



第2-5図 受入農家の作目(複数回答)
(n=262)

注. 無回答の2件を除く。



第2-6図 作業内容(複数回答)
(n=262)

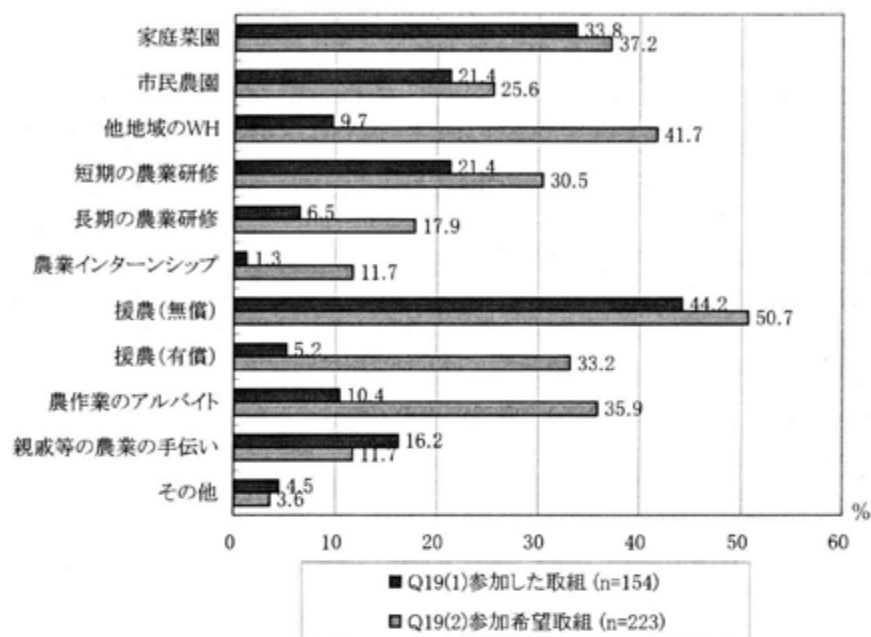
注. 無回答の2件を除く。

(iv) 作目と作業内容

WH参加者を受け入れた農家の作目と作業内容を第2-5図、第2-6図に示しておこう。作目としては「りんご」(74%)、「柿」(56%)、「なし」(27%)といった果樹が多くなっている。これに対応して、作業内容も果樹を中心とした「摘花・摘果」、「収穫作業」(いずれも57%)、「出荷作業」、「収穫物の調整作業」(いずれも28%)等の作業が中心となっている。

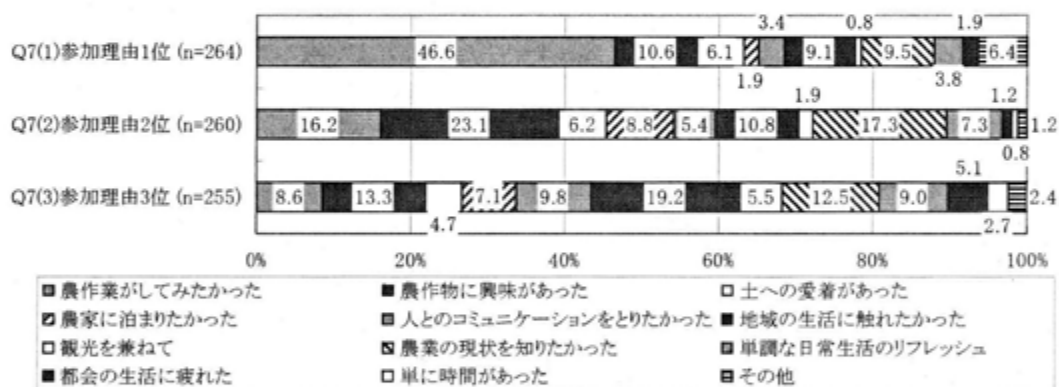
(v) 他地域の農業関連の取組への参加状況

他地域の農業関連の各種取組への参加状況を示したのが第2-7図である。同図では「これまでに参加した取組」と「今後の参加希望取組」を比較している。「これまで」の参加割合が高い取組は、「無償の援農」(44%)、次いで「家庭菜園」(34%)、「市民農園」(21%)、「短期の農業研修」(21%)である。「これまで」と「今後の参加希望」を比較すると、「親戚等の農業の手伝い」と「その他」以外はいずれも「今後の参加希望」の割合が高い。ポイント差が大きいのは「他地域のWH」(32ポイント)、「有償の援農」(28ポイント)、「農作業のアルバイト」(26ポイント)などである。今後、無償・有償の農作業に関わりたという意向を持つ参加者が多いと考えられる。



第2-7図 他地域の農業関連の取組への参加状況

注. 参加希望取組は41件, 参加した取組は110件の無回答を除く。



第2-8図 WHへの参加理由

注. 1) 参加理由1位, 2位, 3位はそれぞれ単一回答。

2) 参加理由2位については無回答の4件を除く。同3位については無回答の9件を除く。

2) WHへの参加理由

第2-8図は、WHへの参加理由を示している。参加理由の第1位では、「農作業がしてみたかった」が全体の半数近くを占め、そのほか「農作物に興味があった」(11%)、「農業の現状を知りたかった」(10%)などの回答割合が若干高くなっている。これに対して、第2位では「農作物に興味があった」(23%)、「農業の現状を知りたかった」(17%)の割合が、第3位では「地域の生活に触れたかった」(19%)の割合がそれぞれ高くなっている。

WHへの参加理由(1~3位積み上げ)を男女別にみたのが第2-5表である。まず、男女計では、「農作業がしてみたかった」(71%)とする参加理由の割合が最も高く、以下「農作物に興味があった」(46%)、「農業の現状を知りたかった」(39%)、「地域の生活に触

れたかった」(39%)の割合が高い。男女別にみると、男性の割合が女性のそれを大きく上回っている項目として「農業の現状を知りたかった」(20ポイント)、女性の割合が男性のそれを上回っている項目として「人とのコミュニケーションをとりたかった」(9ポイント)、「地域の生活に触れたかった」(9ポイント)、「農作業がしてみたかった」(8ポイント)、「農家に泊まりたかった」(5ポイント)が、それぞれ挙げられる。男性は農業・農村への関心が高いのに対し、女性はWHを通じた人との交流への関心が比較的高い。

家族パターン別のWHへの参加理由を第2-9図に示す。全体的に「農業・農作業に対する関心」の割合が高いが、中でも「若年独身(男性)」(91%)、「夫婦(若年子なし)」(88

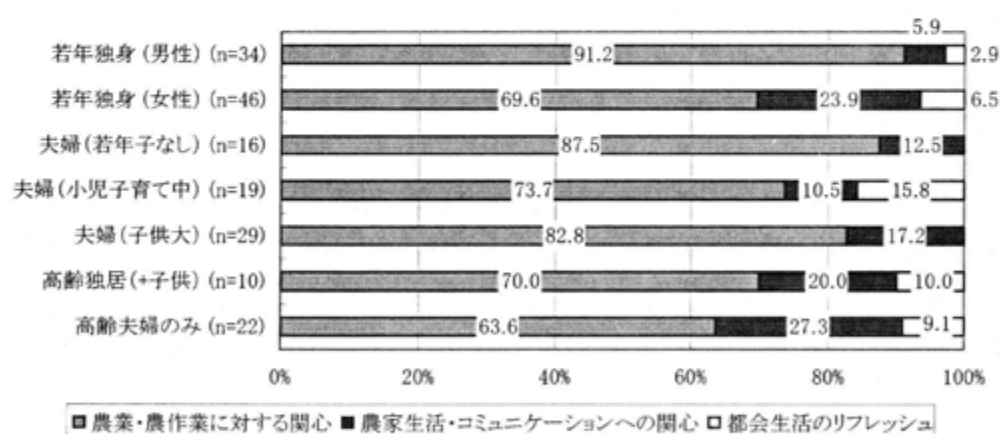
第2-5表 参加理由(1~3位積み上げ)別にみる男女比

(単位:件, %)

区 分	Q3性別		
	男性	女性	合計
Q7参加理由 (1~3位)	農作業がしてみたかった	87(75.7)	186(71.0)
	農作物に興味があった	52(45.2)	120(45.8)
	土への愛着があった	19(16.5)	44(16.8)
	農家に泊まりたかった	23(20.0)	45(17.2)
	人とのコミュニケーションをとりたかった	27(23.5)	48(18.3)
	地域の生活に触れたかった	50(43.5)	101(38.5)
	観光を兼ねて	8(7.0)	21(8.0)
	農業の現状を知りたかった	32(27.8)	102(38.9)
	単調な日常生活のリフレッシュ	21(18.3)	51(19.5)
	都会の生活に疲れた	7(6.1)	21(8.0)
	単に時間があつた	3(2.6)	9(3.4)
その他	16(10.9)	10(8.7)	26(9.9)
合計	147(100.0)	115(100.0)	262(100.0)

注. 1) 参加理由(1~3位積み上げ)は複数回答、性別は単一回答。

2) 無回答の2件を除く。

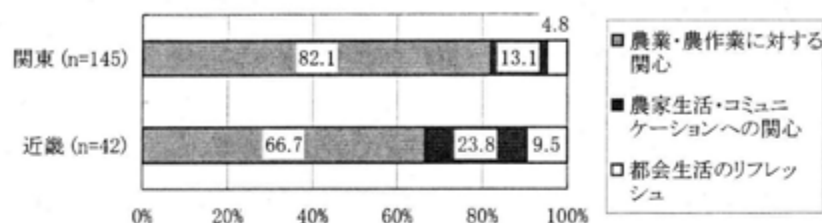


第2-9図 家族パターン別にみる参加理由1位

注. 1) 家族パターン、参加理由1位はいずれも単一回答。

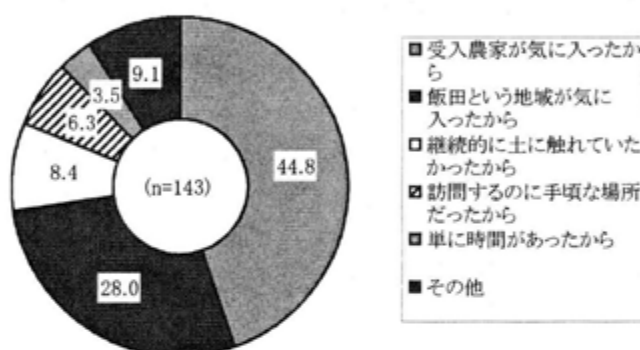
2) 参加理由1位については、「農作業がしてみたかった」、「農作物に興味があった」、「土への愛着があった」、「農業の現状を知りたかった」の4カテゴリを「農業・農作業に対する関心」に、「農家に泊まりたかった」、「人とのコミュニケーションをとりたかった」、「地域の生活に触れたかった」の3カテゴリを「農家生活・コミュニケーションへの関心」に、「単調な日常生活のリフレッシュ」、「都会の生活に疲れた」の2カテゴリを「都会生活のリフレッシュ」にそれぞれカテゴリ統合した。

3) 無回答および家族パターンの「その他」の88件を除く。



第2-10図 関東・近畿別にみるWHの参加理由1位

- 注. 1) 地域ブロック、参加理由1位はいずれも単一回答。
 2) 参加理由1位のカテゴリ統合方法は、第2-3図に同じ。
 3) 無回答および地域ブロックの「関東」、「近畿」以外のブロックである77件を除く。



第2-11図 複数回参加した主な理由(単一回答)

注. 無回答および非該当の121件を除く。

%)の割合は特に高くなっている。「農家生活・コミュニケーションへの関心」は、「高齢夫婦のみ」(27%)、「若年独身(女性)」(24%)などで比較的割合が高い。一方で、「都会生活のリフレッシュ」が高いのは、公私ともにストレスが多いと考えられる「夫婦(小児子育て中)」(16%)の参加者であった。

10の地域ブロックのうち、最も回答者数の多い関東と近畿について、参加理由1位の違いを示したのが第2-10図である。関東と近畿では、市民農園の立地件数が大きく異なり²⁾、農作業に対する潜在的な需要も異なることが予想された。同図によると、関東は「農業・農作業に対する関心」の割合が高いのに対し(82%)、近畿は「農家生活・コミュニケーションへの関心」(24%)や「都会生活のリフレッシュ」(10%)の割合が相対的に高くなっている。

参加理由の最後に、飯田市のWHへの複数回参加者について検討しておく(第2-11図)。複数回参加した理由として最も割合が高いのが「受入農家が気に入ったから」(45%)、ついで「飯田という地域が気に入ったから」(28%)である。「継続的に土に触れていたかったから」とする回答者割合は8%にとどまった。単に農作業をしたいという理由でリピーターとなる人は比較的少なく、リピーターの多くは受入農家や飯田という地域を気に入り、人とのつながりを求めて訪れている。

3) WHへの満足度と評価

(i) WHへの満足度

WHの満足度については、満足できた点、不満な点を定性的に尋ねる設問と、作業、生活・交流、総合の3側面から定量的に尋ねる設問を用意した。前者についての結果を第2-6表に示した。同表によると、満足できた点として回答割合が高いのは「農作業を体験できたこと」(73%)、「農家の人柄が良かったこと」(63%)、「農家における生活体験ができたこと」(51%) などとなっている。これに対し、不満な点については、「特になかった」が64%と特に高く、その他、「交通費がかかりすぎたこと」(18%) との回答割合がやや高くなっている。

WHに参加して満足できた点と参加回数との関係を検証したのが第2-7表である。「3回以上」の参加者では、「農家とのコミュニケーションがとれたこと」(41%)、「WH参加者同士の交流ができたこと」(16%) の割合が、「1~2回」の参加者より相対的に高く、参加回数の多い参加者は、農家との深いコミュニケーションや参加者同士の交流を積極的に評価していることが分かる。

第2-6表 WHに参加して満足できた点、不満だった点

		(単位:件, %)	
区 分		件数(割合)	
Q12満足できた点 (複数回答)	農作業を体験できたこと	188	(72.6)
	農家の人柄が良かったこと	164	(63.3)
	農家における生活体験ができたこと	131	(50.6)
	農家とのコミュニケーションがとれたこと	88	(34.0)
	飯田という地域をよりよく理解できたこと	56	(21.6)
	気分転換になったこと	51	(19.7)
	農業についての理解が深まったこと	50	(19.3)
	WH参加者同士の交流ができたこと	27	(10.4)
	その他	3	(1.2)
	無回答	5	
Q13不満だった点 (複数回答)	交通費がかかりすぎたこと	45	(18.1)
	単調な作業が多かったこと	15	(6.0)
	観光的な楽しみ方ができなかったこと	11	(4.4)
	他のWH参加者と意見が合わなかったこと	6	(2.4)
	受入農家との意見が合わなかったこと	4	(1.6)
	作業内容がきつすぎたこと	3	(1.2)
	その他	34	(13.7)
	不満な点は特になかった	158	(63.5)
計		264	(100.0)

注. 表中()内の割合は分母から無回答を除く。

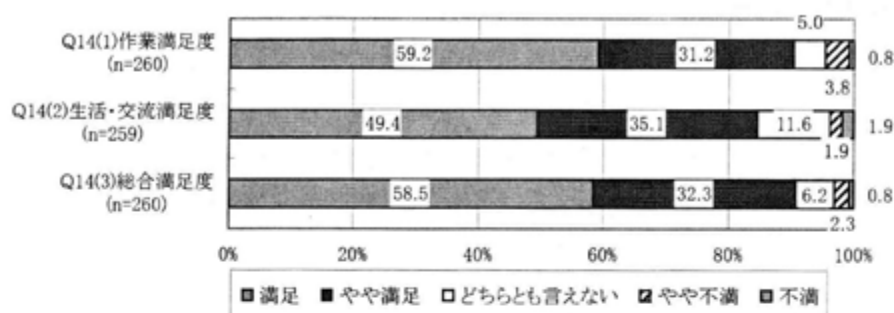
第2-7表 参加回数別にみるWHに参加して満足できた点

(単位:件, %)

区 分	Q12満足できた点									合計
	農作業を体験できたこと	農家の人柄が良かったこと	農家における生活体験ができたこと	農家とのコミュニケーションがとれたこと	飯田という地域をよりよく理解できたこと	気分転換になったこと	農業についての理解が深まったこと	WH参加者同士の交流ができたこと	その他	
1回	86(74.1)	78(67.2)	60(51.7)	38(32.8)	21(18.1)	18(15.5)	23(19.8)	9(7.8)	2(1.7)	116(100.0)
2回	42(72.4)	33(56.9)	32(55.2)	15(25.9)	12(20.7)	17(29.3)	10(17.2)	5(8.6)	1(1.7)	58(100.0)
3回以上	60(71.4)	52(61.9)	38(45.2)	34(40.5)	22(26.2)	16(19.0)	16(19.0)	13(15.5)	-(-)	84(100.0)
合計	188(72.9)	163(63.2)	130(50.4)	87(33.7)	55(21.3)	51(19.8)	49(19.0)	27(10.5)	3(1.2)	258(100.0)

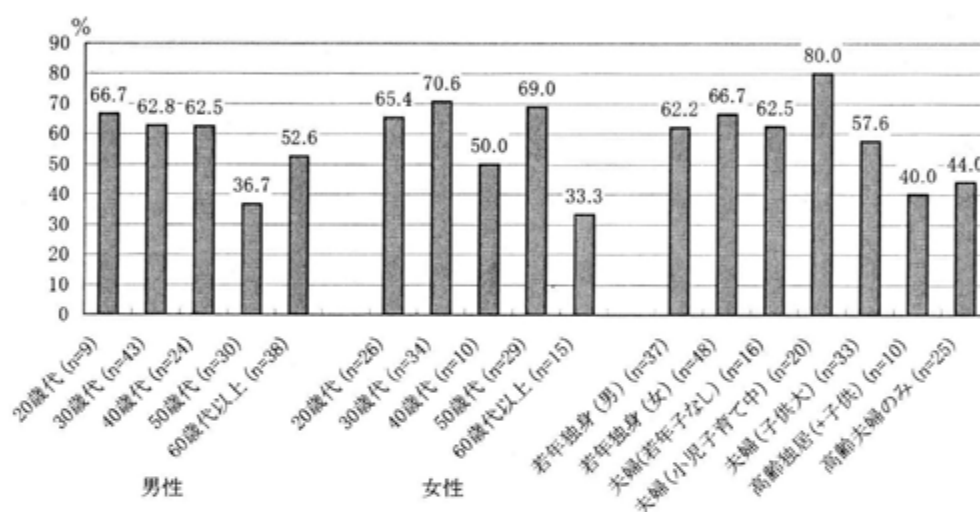
注. 1) 参加回数は単一回答、満足できた点は複数回答。

2) 無回答の6件を除く。



第2-12図 WH参加者の満足度

注. 作業満足度, 生活・交流満足度, 総合満足度についてはそれぞれ無回答の4件, 5件, 4件を除く。



第2-13図 年齢・性別、家族パターン別にみる総合満足度「満足」の割合

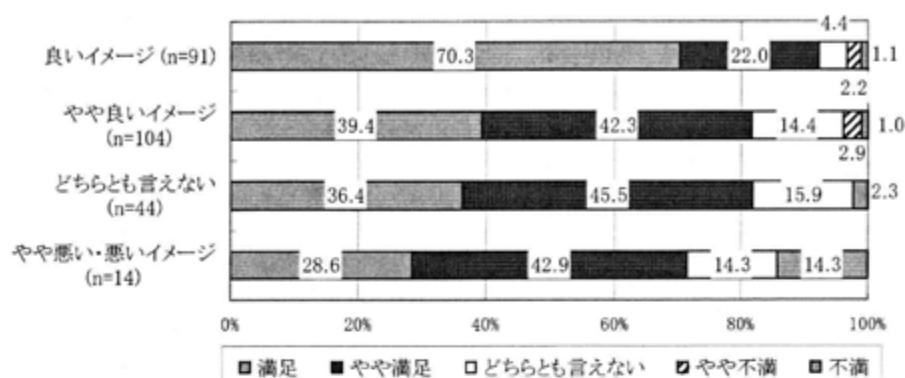
注. 1) 年齢, 性別, 家族パターン, 総合満足度はいずれも単一回答。

2) 年齢, 性別グラフは無回答の6件を除く, 家族パターンは無回答の75件を除く。

作業満足度, 生活・交流満足度, 総合満足度の3指標について第2-12図に示す。作業満足度と総合満足度は, それぞれ「満足」が59%であり, 「やや満足」も合わせると, いずれも90%以上が肯定的な回答を寄せている。生活・交流満足度はこれらよりやや低く, 「満足」が49%, 「やや満足」が35%にとどまっている。

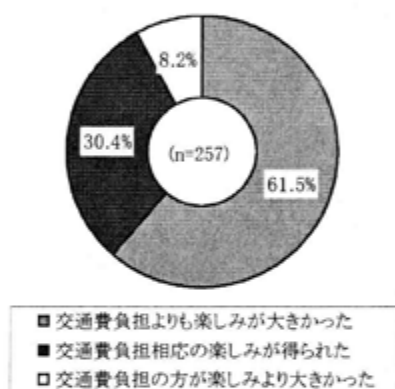
では, 総合的満足度が高いのはこういった属性の参加者なのか。これについては, 年齢別・男女別および家族パターン別に, 総合満足度における「満足」の割合を示した(第2-13図)。WHについて「満足」したとする者の割合は, 男性では「20歳代」(67%), 女性では「30歳代」(71%), 「50歳代」(69%)がそれぞれ高い。家族パターン別には, 「夫婦(小児子育て中)」の80%が最も高い。逆に, 満足度が最も低いのは, 男性の場合は「50歳代」(37%), 女性の場合は「60歳代以上」(33%)であり, 家族パターン別には「高齢独居(+子供)」(40%)となっている。

農村のイメージ別に生活・交流満足度をみたのが第2-14図である。農村に対して「良いイメージ」を持つ者は, 生活・交流の満足度を「満足」とする割合が70%に達している。



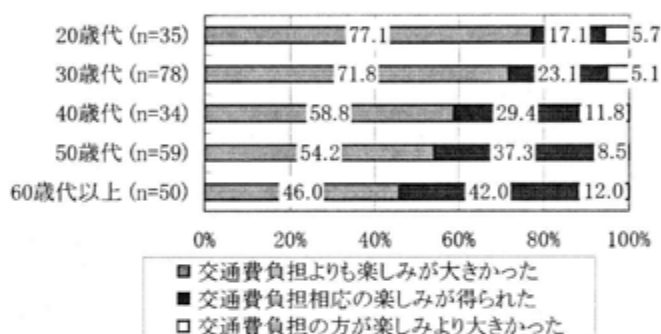
第2-14図 農村のイメージ別にみる生活・交流満足度

注. 1) 農村のイメージ, 生活・交流満足度はいずれも単一回答。
2) 無回答の11件を除く。



第2-15図 交通費に見合う楽しみ (単一回答)

注. 無回答の7件を除く。



第2-16図 年齢別にみる交通費に見合う楽しみ

注. 1) 年齢, 交通費に見合う楽しみはいずれも単一回答。
2) 無回答の8件を除く。

しかし一方で、悪いイメージを持つ層ほど「満足」の割合は少なくなっている。

(ii) 「交通費に見合う楽しみ」と「労働に見合う満足感」

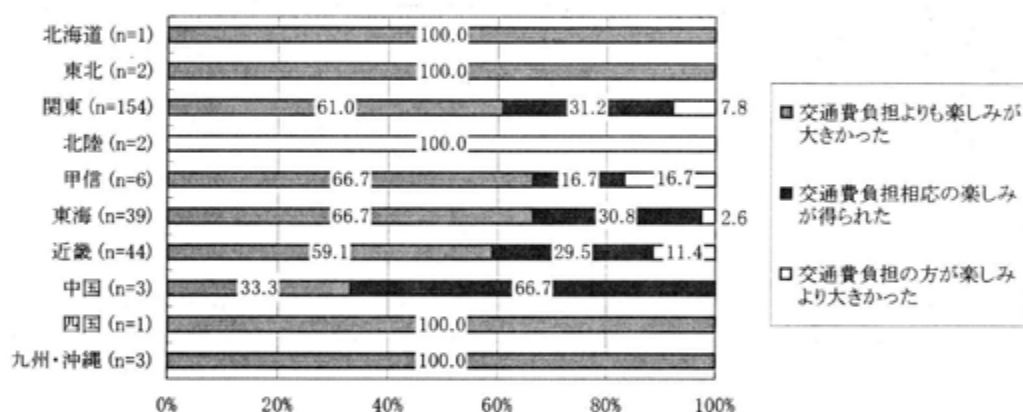
当アンケートでは、WH参加者の満足度を計測する指標として、①「交通費負担に見合う楽しみを得られたか」という設問と、②「労働（苦労）に見合うサービス・満足感を得られたか」という2種類の設問を用意した。これらの設問において、WHへの参加コストと効用の関係を検証した。

前者の「交通費に見合う楽しみ」では、「交通費負担よりも楽しみが大きかった」とする割合が62%と最も高く、「交通費負担相応の楽しみが得られた」が30%である(第2-15図)。これを年齢別にみると、「交通費負担よりも楽しみが大きかった」とする回答割合は、若い世代ほど高く、特に「20歳代」(77%)、「30歳代」(72%)において高い。逆に、相対的に交通費負担を重く感じているのは「40歳代」と「60歳代以上」(共に12%)である(第2-16図)。

また、地域ブロック別に分析したのが第2-17図である。同図に示されているように、母数は少ないものの、「北海道」、「東北」、「四国」、「九州・沖縄」といった、飯田市から遠い地域から訪れた参加者が全て「交通費負担よりも楽しみが大きかった」（いずれも100%）と回答している点は注目される。

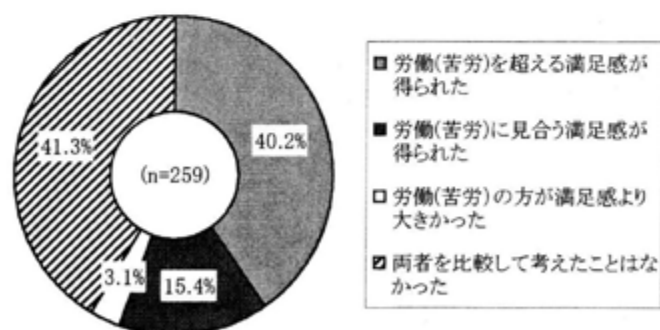
後者の「労働に見合う満足感」に関する設問では、「労働（苦労）を超える満足感が得られた」（40%）とする回答と、「両者を比較して考えたことはなかった」（41%）とする回答がほぼ拮抗している（第2-18図）。「両者を比較して考えたことはなかった」とする回答を除けば、「労働（苦労）を超える満足感が得られた」とする回答は全体の68%を占める。

年齢別に労働に見合う満足感の程度を示したのが第2-19図である。「労働（苦労）を超える満足感が得られた」については、若年世代ほどその割合が高まっている。「60歳代以上」で最も回答率が高いのは「両者を比較して考えたことはなかった」（58%）とする回答であり、同カテゴリの回答率は若年世代ほど少ない。若年層ほどWHに対してシビアに



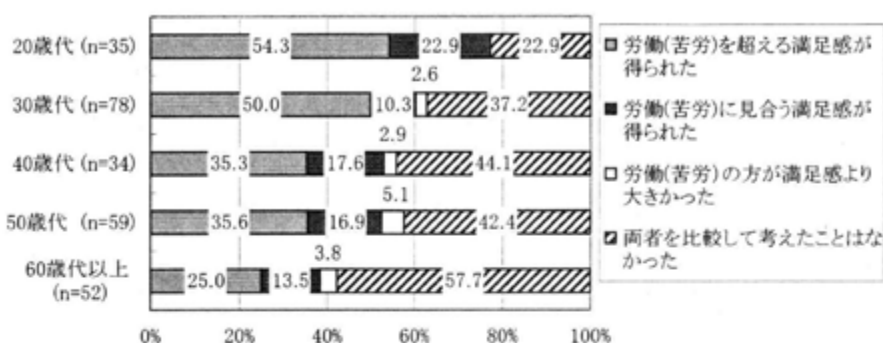
第2-17図 地域ブロック別にみる交通費に見合う楽しみ

注. 1) 地域ブロック、交通費に見合う楽しみはいずれも単一回答。
2) 無回答の9件を除く。



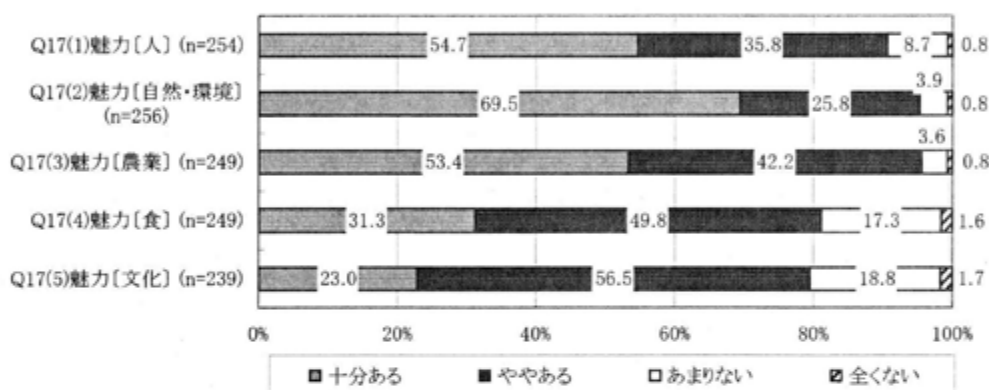
第2-18図 労働に見合う満足感(単一回答)

注. 無回答の5件を除く。



第2-19図 年齢別にみる労働に見合う満足感

注. 1) 年齢, 労働に見合う満足感はいずれも単一回答。
2) 無回答の6件を除く。



第2-20図 飯田独自の魅力

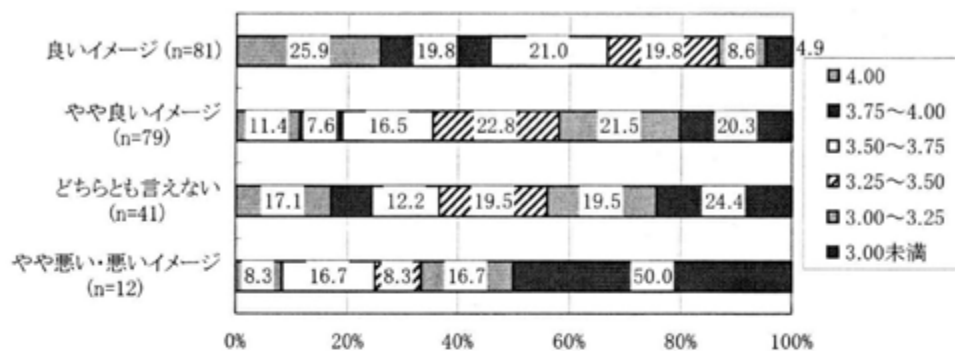
注. 魅力の人, 自然・環境, 農業, 食, 文化はそれぞれ無回答の10件, 8件, 15件, 15件, 25件を除く。

経済的な評価をしていることが分かる。

(iii) 飯田独自の魅力

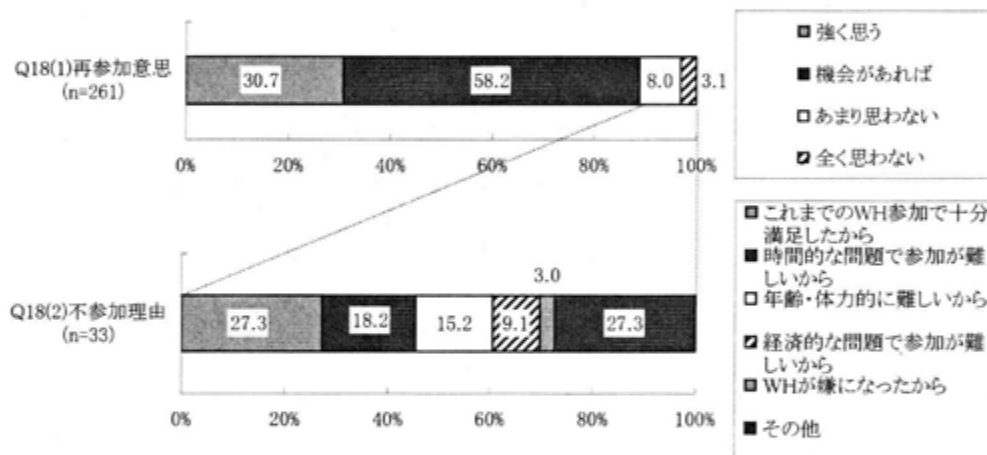
第2-20図では飯田独自の魅力について示した。独自の魅力を測る柱として、「人」、「自然・環境」、「農業」、「食」、「文化」の5つのカテゴリを用意したが、その中で最も評価が高かったのは「自然・環境」である。「自然・環境」については、70%の回答者が魅力を「十分ある」としており、「ややある」を含めると95%が「ある」と回答している。これに対して、評価が最も低かったのは「文化」であり、「十分ある」が23%となっている。なお、別途行った自由回答の分析によると、文化水準の高低がこの結果に影響したというよりは、むしろ農作業目的に数日間滞在するWHでは、地域の文化の魅力まで十分に感じ取ることができなかったと判断した方が適当と考えられる。

次に、参加者が抱く農村のイメージと飯田の魅力の関係をみたものが第2-21図である。農村に「良いイメージ」を持つ者をみると、魅力の平均点^①「3.50以上」の割合が計67%と高い。反面、「やや悪い・悪いイメージ」を持つ者において、平均点「3.00未満」の割合は高く、その割合は67%に及んでいる。



第2-21図 農村のイメージ別にみる「飯田の魅力」の平均点

- 注. 1)「飯田独自の魅力」の平均点は、「人」、「自然(環境)」、「農業」、「食」、「文化」のそれぞれについて「十分ある」を4点、「ややある」を3点、「あまりない」を2点、「全くない」を1点として5項目の単純平均を算出したものである。
 2)農村のイメージは単一回答、飯田の魅力の平均点は数値。
 3)無回答の51件を除く。



第2-22図 再参加の意志と再参加したいと思わない主な理由
(いずれも単一回答)

注. 再参加意志は無回答の3件、不参加理由は無回答および非該当の231件を除く。

4) WHへの再参加意志

今後のWHへの再参加意志についてまとめたのが第2-22図である。WHへの再参加意志については、「強く思う」が31%、「機会があれば」参加が58%となっており、「あまり思わない」と「全く思わない」を合わせても11%に過ぎない。再参加意志のない参加者の理由をみると、「これまでのWH参加で十分満足したから」とする回答が27%存在する一方、「時間的な問題で参加が難しいから」(18%)、「年齢・体力的に難しいから」(15%)といった回答割合も高くなっている。

続いて、参加して不満だった点と再参加意志との関係を見た(第2-8表)。筆者はここで、参加者の再参加意志に影響する不満要因の析出を試みたが、ほとんどの項目において「参加したいと思う」の割合が「参加したいと思わない」の割合を大幅に上回っており、決定的な要因は見つからなかった。「参加したいと思わない」とする割合が高かったのは、「作

第2-8表 参加して不満だった点と再参加意志

(単位:件, %)

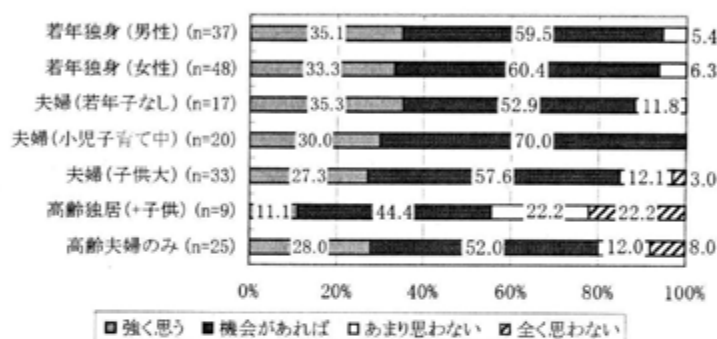
(単位:件, %)

区 分		Q18(1)再参加意思(2カテゴリ)		合計
		参加したい と思う	参加したいと 思わない	
Q13不満 だった点	交通費がかかりすぎたこと	36(80.0)	9(20.0)	45(100.0)
	単調な作業が多かったこと	10(71.4)	4(28.6)	14(100.0)
	観光的な楽しみ方ができなかったこと	9(81.8)	2(18.2)	11(100.0)
	他のWH参加者と意見が合わなかったこと	5(83.3)	1(16.7)	6(100.0)
	受入農家との意見が合わなかったこと	3(75.0)	1(25.0)	4(100.0)
	作業内容がきつすぎたこと	1(33.3)	2(66.7)	3(100.0)
	その他	29(85.3)	5(14.7)	34(100.0)
	不満な点は特になかった	151(95.6)	7(4.4)	158(100.0)
合計		222(89.5)	26(10.5)	248(100.0)

注. 1) 不満だった点は複数回答, 再参加意志は単一回答。

2) 再参加意志については、「強く思う」、「機会があれば」の2カテゴリを「参加したいと思う」に、「あまり思わない」、「全く思わない」の2カテゴリを「参加したいと思わない」にそれぞれカテゴリ統合した。

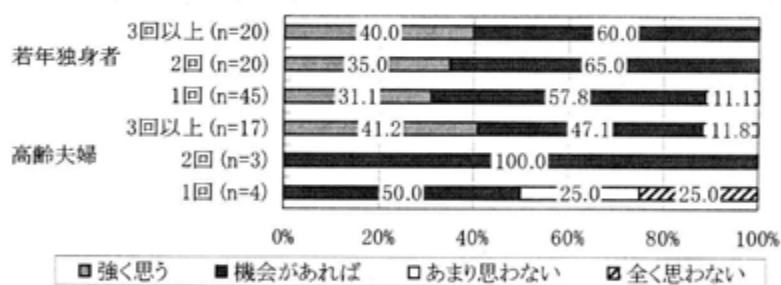
3) 無回答の16件を除く。



第2-23図 家族パターン別にみる再参加意志

注. 1) 家族パターン, 再参加意志はいずれも単一回答。

2) 無回答および家族パターンの「その他」の75件を除く。

第2-24図 若年独身者と高齢夫婦にみる
参加回数別の再参加意志

注. 1) 参加回数, 家族パターン, 他地域の取組への参加希望数はいずれも単一回答。

2) 無回答および家族パターンの他カテゴリである168件を除く。

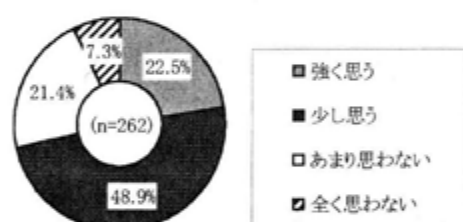
業内容がきつすぎたこと」(67%)と「単調な作業が多かったこと」(29%)等であるが、「作業内容がきつすぎたこと」については、サンプル数が3と少なく、不満要因と断定することは難しい。

家族パターン別に再参加する意志を確認したのが第2-23図である。WHへの再参加について「強く思う」とする割合が高いのは「夫婦(若年子なし)」(35%)、「若年独身(男性)」(35%)、「若年独身(女性)」(33%)などいずれも若い世代である。若年独身者と

高齢夫婦に焦点を絞って、さらに参加回数別に分けると（第2-24図）、「高齢夫婦」は「1～2回」の参加者と「3回以上」の参加者で再参加意志が大きく異なることが分かる。しかも「3回以上」の参加者数はかなり多い。このように、高齢夫婦グループには、“ヘビー・リピーター”ともいべき参加者層が一大団をなして存在していると推察できる。

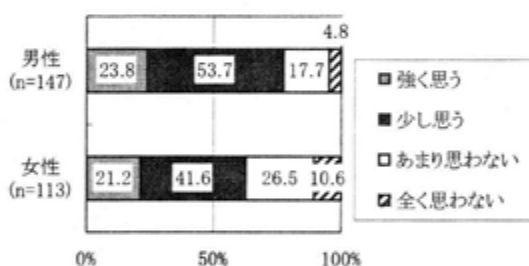
5) 参加者の定住意志

最後に、農村地域への定住意向について検討を行いたい。農村への定住意志については第2-25図に示した。定住について「強く思う」とする回答は23%であり、「少し思う」(49%)を加えると、71%が「定住の意志あり」となる。これらは「あまり思わない」(21%)、「全く思わない」(7%)を大きく上回っており、WH参加者の定住志向はかなり高いことが示されている。男女別にみると、「強く思う」、「少し思う」割合はいずれも男性が高い（第2-26図）。では、農村への定住意志を持つ者は、他地域の農業に関する取組にどの程度参加してきたのだろうか。この関係を示したのが第2-27図である。定住意志について「強く思う」とする割合は、他地域の農業に関する取組への参加数⁽⁴⁾「1個」では20%にとどまるのに対し「5～6個」では67%に及んでいる。他地域の農業に関する取組への参加数が多い者ほど、農村定住に積極的な姿勢を持っていることが分かる。さらに、「農村に良い



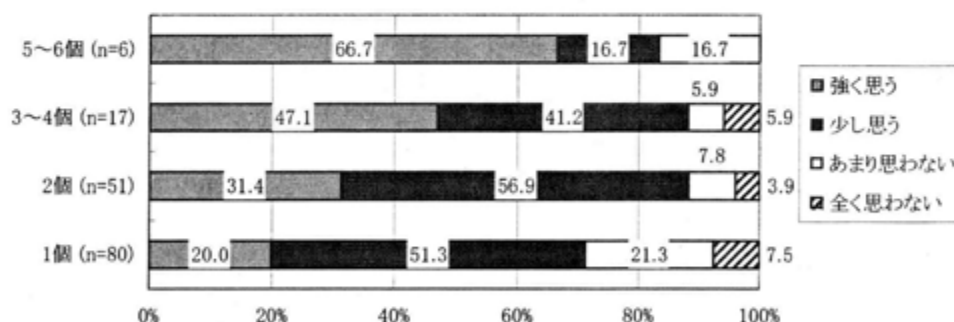
第2-25図 農村への定住意志
(単一回答)

注. 農村への定住意志は無回答の2件を除く。



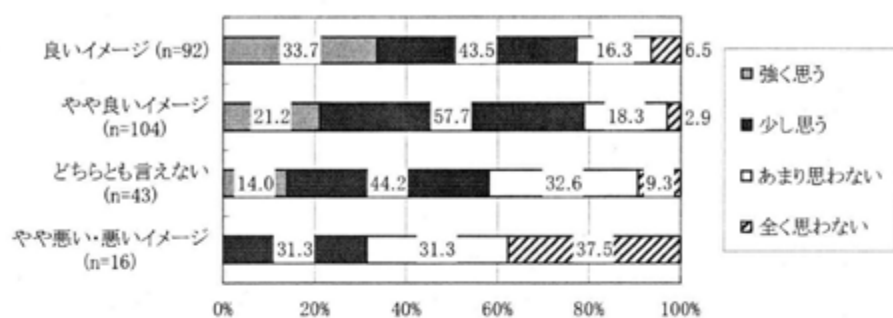
第2-26図 男女別にみる定住意志

注. 1) 性別, 農村への定住意志はいずれも単一回答。
2) 無回答の4件を除く。



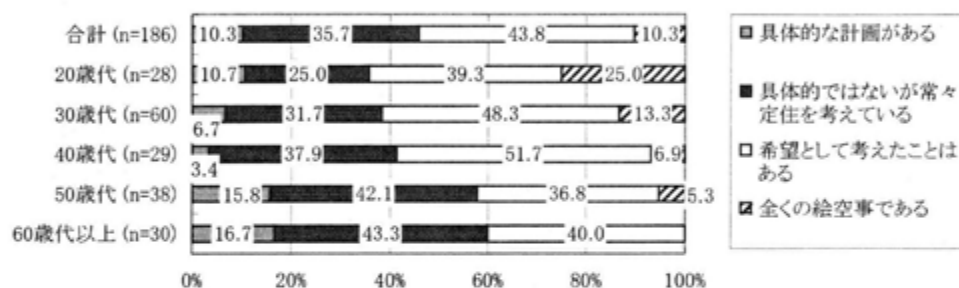
第2-27図 他地域の取組への参加数と農村への定住意志

注. 1) 他地域の農業に関する取組への参加数は、「問19(1)他地域の農業に関する取組」(複数回答)における回答項目数を事後的にカウントした数値である。この数値が高いほどその参加者が他地域の取組に多くの興味を持っていることを示す。
2) 他地域の取組への参加数は数値, 農村への定住意志は単一回答。
3) 無回答および非該当の110件を除く。



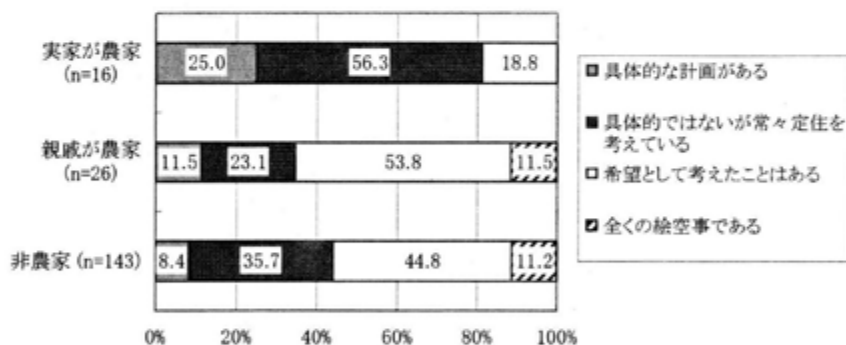
第2-28図 農村のイメージ別にみる定住意志の有無

注. 1) 農村のイメージ、定住意志はいずれも単一回答。
2) 無回答の9件を除く。



第2-29図 年齢別にみる定住計画の有無

注. 1) 年齢、定住計画の有無はいずれも単一回答。
2) 無回答および非該当の79件を除く。



第2-30図 農家との関係別にみる定住計画の有無

注. 1) 農家との関係、定住計画の有無はいずれも単一回答。
2) 無回答および非該当の79件を除く。

イメージ」を持つ回答者のうち、定住について「強く思う」とする者は34%おり（第2-28図）、
「農村に良いイメージ」を持つ者の定住意志の高さも明らかとなっている。

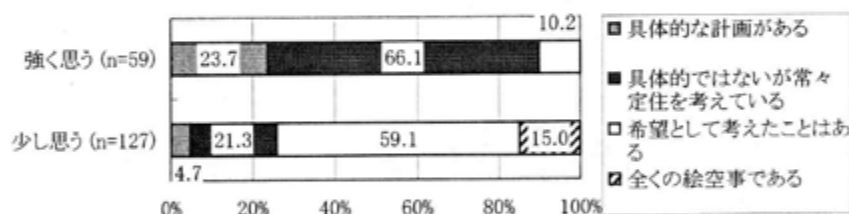
続いて、定住意志があると回答した者には、定住計画の有無と定住する際の生計手段について設問を設けたので、これらについて分析を進めたい。まず、定住計画の有無について年齢別に示す（第2-29図）。ここで注目されるのが「50歳代」と「60歳代以上」である。

「具体的な計画がある」はそれぞれ16%と17%、「具体的でないが常々定住を考えている」割合はそれぞれ42%、43%と、若年世代に比べて高くなっている。

農家との関係別に具体的な定住計画の有無を見たのが第2-30図である。ここでは、「具体的な計画がある」、「具体的ではないが常々定住を考えている」とする回答の割合が、いずれも「実家が農家」の参加者において高い。ここでの「定住」には、実家へのUターンが含まれるとはいえ、かなり高い割合である。

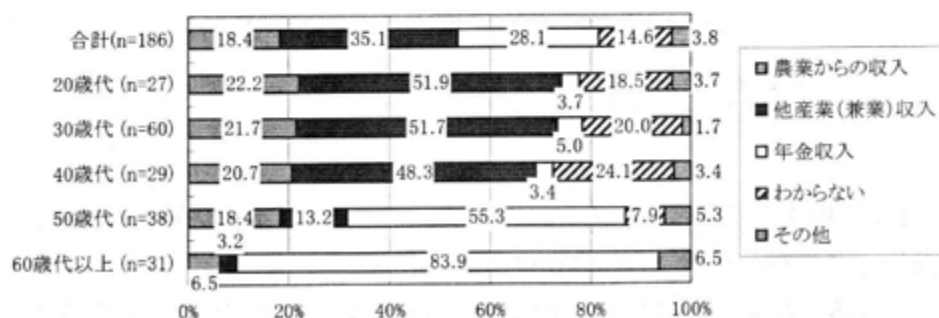
農村への定住意志と具体的な定住計画との関係については第2-31図に示した。農村への定住意志について「強く思う」回答者のうち、「具体的な計画がある」とする回答率は24%に達するが、「少し思う」では同回答率が5%に満たない。また、「少し思う」では、6割弱が定住計画について「希望として考えたことはある」としている。定住意志が強いほど、定住計画の具体性が高いといえるだろう。

さて最後に、定住の際の生計手段について分析しよう。全体の合計数値で見る限り回答率が高いのは「他産業（兼業）収入」（35%）、「年金収入」（28%）であり、「農業からの収入」は18%にとどまる（第2-32図）。これを年齢別にみると、「20歳代」、「30歳代」の若い世代は、生計手段を「他産業（兼業）収入」や「農業収入」としている割合が高いが、「50歳代」以上、特に「60歳代以上」は圧倒的に「年金収入」を見込んでいる。各世代が思い描いている農業経営の姿と定住の実現可能性の差がこの結果に影響していると思わ



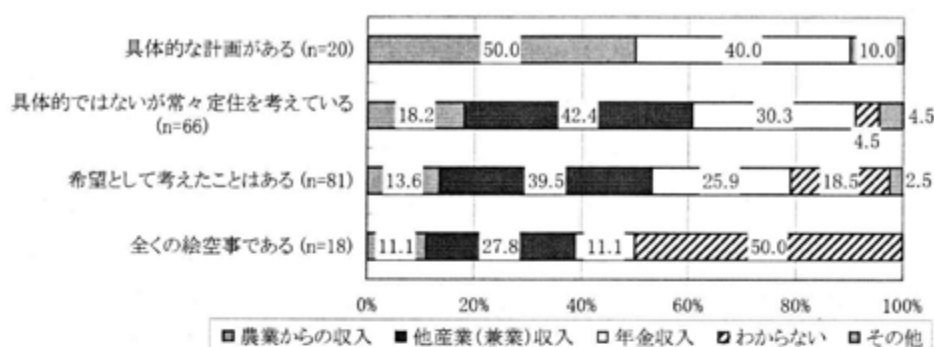
第2-31図 農村への定住意志と具体的な定住計画の有無

- 注. 1) 農村への定住意志、定住計画はいずれも単一回答。
 2) 具体的な定住計画は定住意志について「強く思う」または「少し思う」と回答した者にも設定された設問である。
 3) 無回答および非該当の78件を除く。



第2-32図 年齢別にみる定住の際の生計手段

- 注. 1) 年齢、定住の際の生計手段はいずれも単一回答。
 2) 無回答および非該当の79件を除く。



第2-33図 具体的な定住計画の有無と定住する際の生計手段

注. 1) 定住計画, 生計手段はいずれも単一回答.

2) 無回答および非該当の79件を除く.

れる。また、第2-33図で定住計画と生計手段との関係を見ると、「具体的な計画がある」者に回答割合が高いのは「農業からの収入」（50％）と、「年金収入」（40％）であるのに対して、「具体的ではないが常々定住を考えている」あるいは「希望として考えたことはある」者に割合の高いのは「他産業（兼業）収入」（42％）である。具体的計画を持つ者は、農業収入を基盤として暮らしたいと考える者と、年金収入を基盤に安定した田舎暮らしを希望する者に二極化しているように思われる。

(4)まとめ

以上、飯田市におけるWH参加者を対象としたアンケート調査について様々な観点から分析を行った。当アンケートの分析から、同じ飯田市のWHに参加しても、参加者の年齢、性別、出身地域等によって、その印象や満足度が大きく異なることが分かった。農村定住に意欲を見せる者の属性についても、ある程度明らかにすることができた。以下では、アンケート調査の要点をまとめるとともに、飯田市で行われているWHの課題と展望について若干の見解を述べたい。

アンケートにみるWHの特徴は、第1に参加者の属性である。若年独身者の参加割合が全般的に高く、年齢別の性別構成をみると20歳代では女性、60歳代では男性の割合がそれぞれ高い。参加者にはいくつかの家族パターンが存在し、そのパターンごとに、参加理由や参加回数、WHの満足度などが大きく異なることが分かった。たとえば、高齢夫婦と若年独身女性は、同じく生活やコミュニケーションに関心が高いにもかかわらず、高齢夫婦は参加回数が多い割に満足度が低いのに対して、若年独身女性は参加回数が少ない割に満足度が高いなどの特徴がみられる。

第2に、参加者の性別や居住地域によって参加理由の特徴が異なる。「男性」や「関東出身者」は「農業・農村への関心」が、「女性」や「近畿出身者」は「生活やコミュニケーションに対する関心」の割合が比較的高い。こうした参加理由の特徴は、それぞれの地域にWHのPRを行う際や各農家レベルで参加者に接する際の参考となるのではなかろう

か。

第3に、日常的な農村のイメージによってWHの印象が相当程度規定されている。農村に対して「良いイメージ」を持つ者は、そうでない者よりもWHの満足度が高く、地域の魅力も強く感じ、定住にも前向きであった。

第4に、参加者はWHを非常に高く評価している。参加者の満足度は全般に極めて高く、満足できた点として、「農作業体験」、「農家の人柄」、「農家における生活体験」などが挙げられている。また、WH参加者の受ける効用は、「交通費負担や提供する労働」を上回るとする回答が多く、参加者のWHに対する評価の高さがうかがえる。これに関連して、参加者の再参加意志が高いのも飯田WHの大きな特徴となっている。

第5に、WH参加者の定住意志は高い。単純集計の結果、約7割の参加者が定住意志を示しており、そのうち農村定住を強く志向する割合は23%にのぼっている。また、その中身である具体的な定住計画の有無や定住する際の生計手段については、年齢や性別、家族パターン、農家との関係等によって多様な状況であることが今回のアンケート分析から明らかになった。飯田市のWHは発足後8周年を迎えた。参加者の農作業体験に重きを置いた現状のWHを継続しつつも、参加者の農村定住を視野に入れた「ポストWH」ともいうべき次の一手を農業施策において考え始める時期に来ているように思われる。そのためにも農村定住希望者についての一層の分析は今後欠かせない作業となろう。

以上、アンケート調査の特徴を簡単に述べたが、この分析を通じて、飯田市のWHに対する満足度と期待の高さが改めて浮き彫りになったといえよう。このことは、巻末にまとめた自由回答欄への記述内容からも見受けられ、そこでは、一步進んだWHの有り様を模索する意見が随所に目立った。中でも参加者を一堂に集める全体交流会への改善要望は多い。農家生活やコミュニケーションのあり方を重視する参加者が多い現状や、農村定住意識の高さなどをふまえれば、WHの実施主体はこうした意見を真摯に受け止め、改善する努力を惜しむべきではないだろう。

その具体策として、「飯田市のWHをどのように改善すべきか」あるいは「WH後に農村とどう関わりたいか」などに論点を絞り、お互いのコミュニケーションを図るような機会を設けることは重要である。WHの究極の目的を、地域農業の振興と農業の担い手確保とするなら、WH参加者の綿密かつ計画的なフォローは、今後の最も重要な課題の1つである。

注(1) 「家族パターン」については、回答者の年齢、性別、家族構成より、事後的に分類した。年齢が「20歳代」または「30歳代」で「祖父母、父母」のいずれかと同居または「独居」である者を「若年独身」とし、性別により男女を分けた。年齢が「20歳代」または「30歳代」で、「配偶者」（あるいは+「父母」）と同居である者を「夫婦（若年子なし）」、年齢が「30歳代」または「40歳代」で、家族構成が「配偶者」と「子」（あるいは+「父母」）である者を「夫婦（小児子育て中）」、年齢が「50歳代」で、家族構成が「配偶者」と「子」（あるいは+「父母」）である者を「夫婦（子供大）」、年齢が「60歳代」で、家族構成が「子」または「独居」である者を「高齢独居（+子供）」、年齢が「60歳代」で、家族構成が「配偶者」である者を「高齢夫婦のみ」とした。

- (2) 市民農園の立地件数は、東日本と西日本で大きな差がある。市民農園は全国に2,904カ所あるが、地域ブロック別内訳を見ると、関東が1,501カ所（52%）と過半数を占める。ついで東海（348カ所、12%）、近畿（307カ所、11%）となっている。

附表 地域ブロック別市民農園数

(単位:箇所、%, 区画, ha)

区 分	農園数	区画数	面積
北海道	69 (2.4)	6,982	91
東北	78 (2.7)	4,960	60
関東	1,501 (51.7)	81,838	399
北陸	128 (4.4)	5,593	59
東海	348 (12.0)	14,304	94
近畿	307 (10.6)	16,153	91
中四国	293 (10.1)	10,073	78
九州	171 (5.9)	12,162	81
沖縄	9 (0.3)	416	5
全国計	2,904 (100.0)	152,481	959

資料:農林水産省農村振興局地域振興課調べ。

注. 2004年3月現在。

- (3) 「飯田独自の魅力」の平均点は、「人」、「自然(環境)」、「農業」、「食」、「文化」のそれぞれについて「十分ある」を4点、「ややある」を3点、「あまりない」を2点、「全くない」を1点として、5項目の単純平均を算出したものである。
- (4) 他地域の農業に関する取組への参加数は、「問19(1)他地域の農業に関する取組」(複数回答)における回答項目数を事後的にカウントした数値である。この数値が高いほどその参加者が他地域の取組に多くの興味を持っていることを示す。